

正晴会

調査団体名 : 正晴会
 設立年 : 2017年
 団体URL :

団体代表者名 : 鈴木正晴
 対応してくれた人の名前 : 鈴木正晴、江崎研司(一社モビリティ・ビレッジ代表)、原田康弘(豊田市社会福祉協議会旭支所)、榊原礼美(あやみ)(住民代表サブリーダー)

活動拠点 : 豊田市旭地区
 取材日 : 2018年12月10日

調査員 : 洲崎燈子
 レポート作成者 : 洲崎燈子

活動内容



豊田市旭地区で採れた野菜や山菜を4~12月の毎週土曜、豊田の町中で直売している。リーダーを務めるのは、敷島自治区で区長を務め、地域の自治的な運営に積極的に取り組んできた鈴木正晴さん(71歳、流域圏担い手づくり事例集「敷島自治区」参照)。

設立のきっかけ

2017年のはじめ、社会福祉協議会旭支所の地域福祉活動計画づくりの際に、皆で今の旭の困りごとや課題を考えた。そのときに「お年寄りにとって、農業は欠かせない生きがいになっている。しかし農作物は一度にたくさんできるので、高齢者の少人数世帯が多いこの地域では、ただで人にあげたり、腐らせることになってしまう。それを出荷し、小遣い稼ぎにできる方法がないだろうか？」という話が出た。そこで、これまでも旭地区の農作物の販売は行われてきたが、売れる量には限界があり、もっと多くの量を販売することができないだろうか？と鈴木さんは考えた。

農作物の出荷先が決まる

出荷先については、green mamanの宇角佳笑さん(山村再生担い手づくり事例集・山村再生担い手づくり事例集その後いかがお過ごしですか?「green maman」参照)が仲立ちになってくれて、豊田市の町中を中心に7店舗を展開し、安心・安全な食材の品揃えに定評がある「スーパーやまのぶ」が引き受けてくれることになった。残された大きな課題が、運搬の手段だった。

モビリティ・ビレッジとの出会い

そんな時、おいでん・さんそんセンター(山村再生担い手づくり事例集Ⅲ「おいでん・さんそんセンター」参照)が紹介してくれたのがモビリティ・ビレッジだった。代表の江崎研司さん(62歳)はトヨタ自動車に勤務していた頃、名大と地域の移動を支援する社会実験「あすけあいプロジェクト」に携わっていた。しかし、持続性のある仕組みを作るためには、中山間地に入って課題を見極めながら「移動」に関する支援を行い、住民と一緒に考え行動する担い手も必要と考え、定年退職後の2016年に足助地区でモビリティ・ビレッジを立ち上げた(2017年に一般社団法人化)。おいでん・さんそんセンターが「野菜を運んでみませんか」と働きかけたことで、このモビリティ・ビレッジのボランティア会員が農作物を運搬してくれることになった。

「旭元気野菜プロジェクト」始動

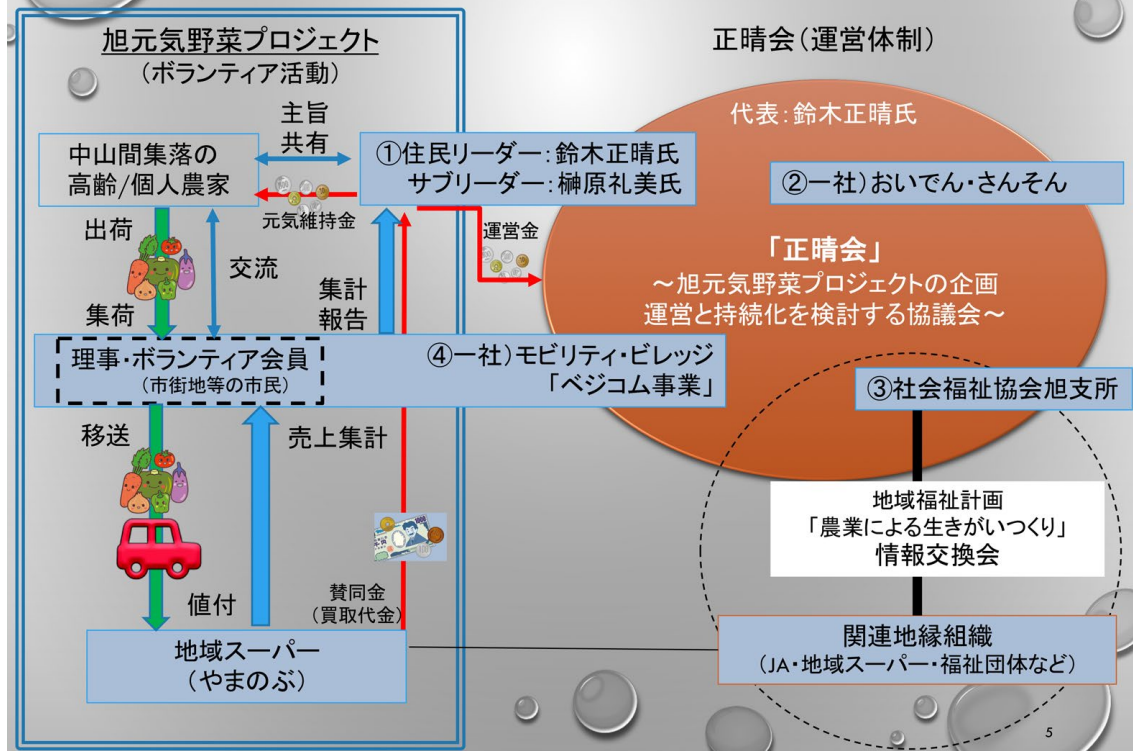
2017年4月、正晴会のスーパーやまのぶへの出荷が始まった(当初は梅坪店、現在は四郷店で販売)。出荷者は毎週土曜の朝、4つある出荷場所のいずれかに収穫物を持ち込む。供給量の指定はなく、出荷者が出せる分だけ出すスタイルである。モビリティ・ビレッジの会員が出した車が順番に出荷場所を回って回収し、スーパーやまのぶまで運ぶ。当初は山菜やタケノコが中心だったが、その後ナスやキュウリなどの夏野菜、スイカ、カボチャ、大根、葉物野菜、根菜類、ショウガ、原木シイタケその他が加わり、これまでに100品目以上が出荷された。出荷期間も3ヶ月の予定だったのが、4~12月の9ヶ月になった。



取材風景。左から原田さん、榊原さん、鈴木さん、江崎さん

「旭元気野菜プロジェクトと運営体制」

持続性のある共働の仕組み構築に向けて2017年より「正晴会」スタート！



キャッチフレーズ

農の持つ福祉力

会のモットー(何を大切にしているか)

地域のお年寄りがお金を得られ、農との関わり、社会との関わりを続けられることが、お年寄りの健康づくりにつながる。出荷者は、農作物を「もっと上手に作りたい」「もっとたいへん(たくさん)作りたい」と意欲を持つようになった。お金だけだとギスギスして事業が続かないが、お金がなくても続かない。「きずな経済」をめざしている。

設立から現在に至るまで変化したこと

- ・以前は採ったものをそのまま出していたが、商品にするには袋詰めをする必要がある。袋詰めをやまのぶに頼むと人工(にんく)賃がかかり、収益が目減りする。自分たちで袋詰めをするようにしたら、単価が少し上がった。出荷者は袋詰めがうまくなった。
- ・商品をどのように売れば喜ばれるか考えるようになった。出荷者の皆さんはサービス製品が旺盛なのでキュウリを10本も20本も袋に入れたりしていたが、それでは売れない。消費者目線になれるようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

運営組織として(一社)モビリティ・ビレッジ、豊田市社会福祉協議会旭支所(老人福祉センターぬくもりの里)、(一社)おいでん・さんそん。出荷先がスーパーやまのぶ。正晴会の鈴木正晴さんと榎原さんが地域をまとめている。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

旭地区で生産される山菜や農作物の販路を確保して、お年寄りの生きがいを支援している。

現在直面している課題

・後継者問題。若い人に入って欲しい。旭地区では榊原さんや啓佑君(山村再生担い手づくり事例集Ⅱ「あさひ若者会」、流域圏担い手づくり事例集「ちんちゃん亭」参照)、浅野君など農業に関わる若者が増えていて心強い。組織的に成立しないかと思い、他地域の事例等も研究している。持続可能な活動になる制度を作っていきたい。

今後やってみたいこと

・野菜は取れるときは一度に大量に取れるため、売れ残るともったいないので、加工品を作っていきたい。ペーストやドライフルーツなど。また、取れた野菜を新鮮な状態で保存できる真空パックの機械を購入できればと思っている。

・出荷品をストックしておける倉庫のような場所が欲しい。管理人を置けるとよい。地域にはやまのぶ以外にメグリアなど他の店に出荷している人もいるので、1ヶ所に集めておいてこの日はやまのぶ、この日はメグリアに出荷、というようにできるといい。みんながこの地域でうまくやってくれるようにしたい。

・現在はモビリティ・ビレッジのボランティア(登録している8~10人のメンバーがネットでスケジュール調整して、毎回2人が参加)が出荷にあたって、売り上げからガソリン代とお茶代程度の金額をバックしてもらっている。出荷者を増やし、ドライバーにパート代程度を支払えるようにして、ターナーの小仕事になるようにしたい。



正晴会の皆さん

チームオリジナルの質問

<質問内容>

この事業には福祉という位置づけで始まりましたが、今後はどのように展開される予定ですか？

<答え>

福祉の観点で出荷してもらっているのでも、出荷物の量や形の制約が少ない。ビジネスにすると規格が厳しくなるので、出荷者が減るかもしれない。関わる人を増やしたい。ただ今後は、ビジネスの視点も参考にしながら体制を改善していけるといい。福祉とビジネス、どちらにシフトしていくにしろ、続けていくことが重要。

...山菜を採る林を見せて頂きました...

鈴木さんをご自宅の裏山でたくさんの山菜を収穫しています。よく間伐された明るいヒノキ林の中には、若葉・若芽が山菜として人気のあるコシアブラやタラノキがたくさん生えていました。人工林でも間伐すれば育つのだそうです(そしてコシアブラは、山の手入れをしないと細くなってしまふのだそうです)。ツクシは草原だけでなく林内でも採れます。はかまを取らないものでもよく売れて驚いたそうです。シダの仲間で、クセがなく食べやすいゴゴミは植えたら増えたといいます。竹林で採れるモウソウチクやハチクのタケノコは人気が高く、スーパーの店頭で直売したら店舗の開店前に売り切れたこともあるそうです。林縁から畑までの草刈り場だった場所ではワラビやゼンマイ、ウドも採れます。明るい林内から林外に続く空間はまさに山菜の宝庫となっていました。一から栽培する必要のある作物と違って、生育環境を整えれば収穫できる山菜は、イベントなどで売ると利益率が高いのだそうです。

放置人工林は豊田市のみならず全国で問題になっていますが、人工林でも間伐すれば、これだけ豊かな山の恵みをもたらしてくれるのだということを初めて知り、驚きました。このことが多くの山主さんに知られることで、間伐への関心や意欲の向上につながっていけばと思います。(洲崎)

写真



林内での山菜採り



パック詰めされたコシアブラ



店頭販売のようす

* 取材風景以外の写真は(一社)
モビリティ・ビレッジHPより転載